

第三篇 生物進化論と社会哲学

第五章

今日、社会主義に対する哲学的根拠からの非難は、社会主義は生存競争を滅ぼそうと企図するものであるから、生物進化論の原理に反する空想であると言うことにある。これはまさしく大問題である。

5—1 社会主義と進化論の関係

科学哲学の一切の基礎が生物進化論にあり、生物進化論の根本原理が生存競争説にあるとすれば、社会主義といえどもこの例外に立つことができないことは言うまでもないことであろう。しかしながら、今日の生物進化論は、単に生物種族は進化によって生じるものであるという事実を発見したにすぎないのであって、人類の生物界における地位を誤り、説明の理由としてとられている生存競争説も古今に比類のない非常に支離滅裂を極めたものであり、個人主義によって解釈しているものである。このため、生物進化論者は生存競争説を掲げて、社会主義を空想であるとか、非科学的であるとか、社会の進歩を停止させようとする不可能なことを計画するものであると論難する。社会主義者はまた生物進化論を回避して、社会主義は生存競争を滅ぼすといっても、なおその他に名誉、道徳などの競争があるというような弱い理論を築き、辛うじて対抗しているにすぎない。我々は信じている。社会主義がもし生存競争説と矛盾するならば、まさに非科学的な空想にすぎないだろうし、自ら科学的社会主義と称しようとも、それは経済学、倫理学、歴史学などの諸科学の上においてのみ言うことのできるものであって、それら諸科学の根底となる社会哲学の上からすれば、どのように言ったところでユートピアであるにすぎないと言うべきである。社会主義は、人類という種族の生物社会の進化を理想として主義を立てているものである。それならば、当然人類という生物種族を含めた生物進化論の原理である生存競争の外に逸脱することはできず、もしこの原理を排斥するほどの有力な根拠もなく、むやみに科学そのものに対してもっぱら罵倒するのであれば、どのように言ったところで非科学的であることを免れることができない。——科学的社会主義は、どこまでも科学の厳粛な理論の上に築かれなければならない。

ただ、今日の科学者のいわゆる生物進化論というものは、我々が出しゃばって生物学の範囲内に侵入して体系化しなければならないほど、矛盾、混乱を極めた理論以外に何も持ち合わせていない。つまり、生物進化の事実を個人主義の独断的な思想によって解釈していること、人類の生物界における地位を獣の種族の中に入れていないこと、この二点に矛盾、

混乱があるのだ。だから、我々は生物進化論について触れなければならないのである。

5—2 丘浅次郎博士の進化論について

我々はここで、こうした生物進化論についての日本における代表的な学者として、東京高等師範学校¹教授で理学博士の丘浅次郎氏²を取り上げ、氏の『進化論講話』の社会主義批評を指定しよう。我々は、氏のような真理そのもののために主張をしている学者によって、社会主義が非難されたことを深く惜しむところであるが、これは決して氏の責任ではない。ダーウィンその人が生物進化論を獣教としてしまい、生存競争説を個人主義によって解釈して伝えたためなのである。氏はその進化論を単に宣伝する者として、彼らの誤った点を伝えたにすぎないのだ。ただ、我々が特に氏を指定したのは、世間一般の人に生物進化論を普及させる目的で書かれたという『進化論講話』の大著が、最後の暗黒に満ちたページによって社会進化論の宣伝を阻害し、社会主義に対する嘘っぱちを驚くべき力で広める力があるからである。そしてその暗黒に満ちたページの全てにおいて、獣教の生物進化論と個人主義の生存競争説を遺憾なく発揮しているからである。そこには、死刑による淘汰を唱える刑法論がある。歴史の進化を無視し、革命の意義を理解しない社会循環論の思想がある。異人種間の殺戮の競争を主張する積極的尊王攘夷論がある。人種の発展、国家の強盛は人種内、国家内の個人間の競争だけに基づくという個人主義の生存競争説がある。種族を維持するものとしての生殖であることを理解しない人口論がある。異人種、異国家間において永久に戦争は消滅せず、世界が一つの社会となるという社会進化の将来を空想であると言うイモリ的な国家学³がある。そうではないのだ！ 『進化論講話』の全部を通じて、未だ混沌として体系がない生物進化論の祖述として生存競争の単位を定めず、生存競争の目的を理解せず、生存競争の相手を誤り、生物種族の階級に伴う生存競争の内容の進化を知らず、生物進化論における食物競争と雄雌競争の地位について注意せず、人類という種族の今日の地位、今後の進化について推及することがない。よって、我々にその社会主義批評を左に掲げさせよ⁴。

「現在の社会制度が完全無欠でないことは誰も認めなければならないが、さてこれをいかに改良すべきかという問題を議論するときにあたっては、常に進化論を基として着実に考えなければ何の利益もない。社会改良家がいくつも出ても、ことごとく痴人の夢を説くようなことを言うのはなぜかという、一つは人間というものはいかなるものであるか十分に考えず、みだりに高尚な者と思い誤っていること、一つは競争は進歩の唯一の原因で、いやしくも生存している間は競争の避けられないことに気づかないことに基づくようであ

¹ 原文では、「帝国大学」と記されており、本文中に〔東京高師カ〕と指摘されている。指摘のとおりだとすれば、「東京高等師範学校」の誤りであろう。

² 丘浅次郎は、明治、大正期に活躍した動物学者である。ヒル・ホヤ・コケムシなどの研究で業績を残し、また本文で取り上げているように、進化論についての一般書を書いており、進化論の普及に貢献した。

³ イモリと読んだ理由については、第二篇第四章の注四二参照。

⁴ 『進化論講話』は、口語体で書かれているが、一部古い言い回しもあるため、現代的に文章を変更した。

る。

異人種間の競争の結果は各種族の盛衰栄枯であって、同種族間の競争の結果はその種族の改良進歩であることは前にも説いたが、これを人間に当てはめても全くその通りで、異人種間の生存競争は各人種の盛衰存亡の原因となり、同人種内の競争はその人種の改良進歩の原因となる。それ故、多くの人種が相対して存在している以上は、異人種との競争は避けられないのみならず、同人種内の個人間の競争も廃することはできない。分布の区域が広く、個体の数の多い生物種族は、必ず若干の変種に分かれ、後には互いに相戦うのであるが、人間は今日ちょうど⁵その有様にあるため、異人種がある方法によって相戦うのはやむを得ない。しかして人間の競争において、進歩の遅い人種は、到底勝つ見込みはないから、いずれの人種も専ら自己の改良進歩を図らねばならないが、そのためにはその人種内の個人間の競争が必要である。

社会の有様に満足せず大革命を起こした例は歴史上いくらかもあるが、いずれも罪を社会制度のみに帰し、人間とはいかなるものであるかを忘れて、ただ制度さえ改めれば黄金世界になるかのように考えてかかるため、革命の済んだ後は、ただ従来権威を振っていた人が落ちぶれたのを見て、しばらく愉快を感じる他には何の面白いこともない。世は相変わらず末世⁶で、競争はやはり昔の通り激しい。今日社会主義を唱える人々の中には、往々突飛な改革談を説く者があるが、もしその通り改めて見たならば、やはり以上のような結果を生じるに違いない。人間は生きて繁殖して行く間は競争は免れず、競争があれば生活の苦しさは何日も同じである。

教育の目的は自己の属する人種の維持、繁栄であることは、既に説いた通りであるが、進化論から見れば社会改良もやはり自己の属する人種の維持、繁栄を目的とすべきである。世間には戦争と言うものを全廃したいとか、文明が進めば世界中が一国になってしまうというような考えを持っている人もあるが、これらは生物学上到底出来ないことで、利害の相反する団体の並び存する以上は、その間にある種類の戦争が起こることは決して避けることはできない。しかして世界中の人間がことごとく利益の相反しない地位に立つことができないはもとより明瞭である。敵国、外患がなければ国はたちまち滅びるという言葉の通り、敵国、外患があるので、国というものがまとまっているから、仮に一人種が他の人種に打ち勝って世界を占領したとしても、場所場所によって利害の関係が違えば、たちまち争いが起こって数ヶ国に分かれてしまう。わずかに一県内の各地から選ばれた議員らが集ってさえ、地方的利害の衝突のために激しい争いが起こるを見れば、今世界が一国となつて戦争の絶えるというようなことが望めないのは無論である。

若干の人種が相対して生存する以上は、各人種は努めて自己の維持、繁栄を図らなければならないが、他の人種に負けないだけの速力で進歩しなければ、自己の維持、繁栄は望

⁵ 原文では「恰度」となっていて、意味がわからない。「ちょうど」にも「あたかも」という意味が含まれるので、丘は「ちょうど」のつもりで書いたのだろう。よって、「ちょうど」と読んだ。

⁶ 原文では「澆季」となっている。「澆季」とは、「道徳が衰え、人情が浮薄になった時代」のことで、末世のこと。

むことはできず、速かに進歩するには個人間が競争による他はない。そうであれば現在生存する人間は、敵である人種に滅ぼされないためには、味方同士の競争によって常に進歩する覚悟が必要で、味方同士の競争を厭うようなことでは人種全体の進歩がはかどらないために、敵である人種に負けてしまう。

今日の社会の制度には改良を要する点がたくさんにあるが、いずれに改めても競争という点を到底避けることはできない。他の人類と交通もない所に閉じこもって一人種だけ生存し得る場合には、激しい競争にも及ばないが、その代わり進歩が甚だ遅いため、後に至って他人種に接する場合にも、あたかもニュージーランドのダチョウ⁷のように、たちまち滅ぼされてしまう。世間には、生活の苦しみは競争の激しいことに基づくので、競争の激しいのは人口の増加が原因である。それ故、子を産む数を制限することが必要であるというような考えを持っている人もあるが、先に述べた所によると、これは決して得策と言えない。今日のところで必要なことは、競争をやめることでなく、むしろ自然淘汰の妨害となるような制度を改めることであろう。人種生存の点から言えば、能力、健康ともに劣等なるものを人為的に生存させて、人種全体の負担の重くなるような仕組みをなるべく減らし、能力、健康ともに優等なる者がいずれの方面にも主として働けるような制度をなるべく完全にして個人間の競争の結果、人種全体が速かに進歩する方法を取ることが最も必要である。このような世の中に産まれて来た人間は、ただ生存競争と心得て力のある限り競争に勝つことを心掛けるより他に致し方ない。

人道を唱えたり、人権を重ずるとか、人格を尊ぶとか言って、紙上の空論を基とした誤った説がしばしば出ることがある。例えば死刑を廃止すべしというようなものは、この類で人種維持の点より見れば、全く根拠のない説であるのみならず、明かに有害なものである。雑草を刈り取らなければ庭園の草が枯れてしまうように、有害な分子を除くことは人種改良にも必要なことで、これを廃しては到底改良の実は挙げられない。単に人種維持の上より言えば、なおいっそう死刑を盛んにして、再三刑罰を加えても改心しないような悪人は容赦なく除いてしまう方がはるかに利益である。」と。

5—3 丘博士のような誤った考えが出てくるのはなぜか

こうした魔界の人のような暴言は、もちろん法律学、歴史学、国家学、社会学に関する知識が足りないことに基づくものであることは言うまでもないが、結局は生物進化論そのものが未だ体系化されていないからである。——つまり第一に、生物界における人類の地位を他の獣と同じ階級に含めるからである。ダーウィンは『種の起源』の初版において、キリスト教の信仰と甚だしく食い違うことを思いめぐらし、人類の地位について説明することを避けた。それと同じように、今日の生物進化論者はキリスト教が「人類は神の子である」と考えてきた独断を打破するのに急であって、正確に人類の地位を定める暇がなく、

⁷ 原文では、「駱駝鳥」となっている。文字からすると、ダチョウのことであるが、ダチョウはアフリカに生息しており、ニュージーランドには生息していないのではないか？

振り子の運動法則によって止まるべき点を通り越し、同じく独断である他の「人類は獣である」という反対の極点に走っているのである。振子は永久に運動し続けるものではない。我々はこの振子を止まるべき点に止まらせなければならない。もし今日の学者によって想像されるように、我々の神という、人類よりもはるかに進化した生物が他の惑星に生息するならば、また我々人類の生息しているこの惑星が他の惑星のように進化しているならば、また進化に頂点がなく、人類が進化の頂点でないならば、我々人類は将来に進化していくであろう神と過去に進化してきた獣の中間に位置する過渡的な生物である。今日、我々人類は猿であることから分化した時代の祖先の化石を発掘し、類人猿と名付けるものを見出すならば、我々人類が類人猿としては消滅しているように、さらに人類として消滅した後においては、我々人類から分化して進化した人類の子孫である神の化石学者によって「類神人」として発掘されるであろう半神半獣の存在である（この説明は社会進化の理想において詳しく論じる）。彼ら生物進化論者は、人類が類人猿から進化し、類人猿が四足の獣から進化し、四足の獣が鳥類とともに驚くべき形態を持っていた爬虫類から分化し、爬虫類が今日と全く形態を異にした魚類から進化したとか、そして人類は胎児の九ヶ月間において魚類からの十億年の進化の過程を経験するとか言う。それに従い、彼らは過去を顧みて大胆に推理力を発揮しているはずなのに、その推理力が人類の今後の進化という将来の進行には完全にくじけてしまっていて働かないというのは、まさに大笑いすべき現象ではないか。——今日までの生物進化論は、あたかも人類を進化の終着点であるかのような独断を持って、進化論を組織している。ダーウィンの時代から、生物進化論は人類を神によって作られた神の子であると言うキリスト教の信仰を打破するため、完全に人類が動物であることを他の諸科学からも立証し、骨格、筋肉、内臓、脳髄、発生の状態を比較している。そしてそれによって、キリスト教の教義が科学的批評に耐えられない独断にすぎないことを論じることににおいては、非難されるべき欠点はない。我々は、人類を完全に神の子であるとして、他の生物と隔離した天空に置くことが非科学的であることを否定する者でないことは言うまでもない。しかしながら、骨格も、筋肉も、内臓も、脳髄も、発生して後も、決して他の獣と全く同じではないのに、獣と全く同じで異ならないと独断的に述べる彼らは、彼らが「科学的批評に耐えられない」と罵るキリスト教以上に科学的研究において注意深い者ではない。完全に神の子であると言うことが非科学的であるならば、完全に獣と同じだと言うこともまた等しく非科学的である。——人類は動物の一種である。しかしながら、動物の種族の中で獣が鳥類もしくは魚類と階級を異にしているように、獣とは全く階級を異にした「人類」という種族の動物である。今日の生物進化論が持つ第一の誤謬は、人類を獣と同じ階級に置くことにある。彼らの打撃によって崩壊したキリスト教が迷信教であったならば、彼らの生物進化論は明白な迷信の獣教である。そして社会が一定の進化を遂げるまで中核となるものであった神の迷信教が、しまいには無数の科学者を殺戮し、社会の進化を阻害したように、神の迷信教を打破して社会の進化に貢献した生物進化論もまた、今日ついに迷信の獣教となり、社会の進化を阻害している。まさに、獣教徒の生物

進化論者は、今日思想上、社会上において純粋なローマ教の司祭⁸として存在する。神の迷信教徒からダーウィンらが非難されたように、獣教の迷信者から社会主義の哲学宗教が迫害されているのは、社会進化の常としてどうしようもない。

人類という階級の種族を他の種族である獣の階級に含めるために、今の生物進化論は人類の生存競争も獣の生存競争も内容において差がないものと捉え、優勝劣敗とか、適者生存というような文字を、獣としての適者、人類としての優者として区別せず、独断も甚だしい「弱肉強食」という戦慄すべき一語から一切演繹している。もしいわゆる弱肉強食というものが、牛は蚊に刺されるから弱肉であって、人はノミに食われるから強者の肉であるとの意味ならば、常軌⁹を逸した文字の使用法であるにもかかわらず、生物学上の事実としては十分に真である。だが、こうした文字を使用する者にとっては強弱の標準の多くを爪と牙に求めるのである。言うまでもないが、適者生存とか、優勝劣敗とか、はたまた弱肉強食とかいうような文字は、現実の現象を外から包むものでしかなく、内容の空虚な言葉である。つまり、単に「生物種族の環境に適する者は優者として生存する」との意味にすぎず、その内容として入る環境が異なるに従い、適者となる者、強者となる者を異にするのである。そして環境は各生物種族の各階級が異なるに従って異なるのである。あの韓愈が、「蛟龍¹⁰も水から陸¹¹に上がってしまえば、アリやケラに辱められる」と詠んだことは、環境によって優者、適者、強者がそれぞれ異なることを最も明白に説明したものでないか。ライオンは、熱帯の砂漠という環境においてのみ適者であって、優者として生存するが、環境の異なった北極の氷雪の中においては、柔順なトナカイのほうがはるかに適者であって、強者として生存する。ワシは広々とした天空をかけるという境遇においては、適者となり、強者となるが、そのワシを軒の端にある壁と庇の間¹²という境遇に持つてくるならば、まさしくツバメやスズメよりも不適者となり、劣敗者となり弱者となるしかない。土の中を走ることににおいては、馬はモグラよりも劣敗者であって、泥の中に潜むことににおいては、鯛はドジョウよりもはるかに不適者である。腐敗した汚い物の中に埋まるということでは、ミミズは社会主義者よりも環境に適応したものであって、ウジは肥だめの縁において生物学者よりも優者として生存するのである。——今の生物進化論者でこれを知ったならば、ただ獣の優者を全く環境を異にした人類の適者に類推して憚らないという態度

8 原文では「僧侶」だが、それだと仏教徒を連想してしまいやすいので、「司祭」にした。ここでの「ローマ教」というのは、ローマ教会を中心としたカトリックであると思われるので、プロテスタントに配慮する必要はないであろう。

9 原文では「常経」となっている。そうすると、「常に守るべき道」という意味になる。しかし、後に「逸した」という文言からすると、「常軌」の誤りだと思われる。よって、「常軌」の誤りと読む。

10 「蛟竜」とは、「まだ龍にならない蛟^{みずち}（蛇に似た動物）」のことで、想像上の動物。まだ時に恵まれていない英雄のたとえとしても用いられる。原文では「詠んだ」に当たる言葉はないが、韓愈を引き合いに出しているのだから、韓愈の詩の中に登場するのだろうと思い、補った。

11 原文では「陸梁」となっている。これは「おどりまわる」という意味であるが、これでは文脈上意味が通じない。よって、意識を試みた。

12 原文では「罅隙」となっているが、意味がよくわからない。軒のツバメの話があるので、そこから意味を推測して意訳した。

をどうしてとれるだろうか。もし正常な精神状態を失い、ドジョウが泥の中で優者であるから鯛を泥の中に投じて窒息させよとか、モグラが土の中で優者であるから馬を穴に葬って生き埋めにせよとか、人類もまたミミズ、ウジなどの境遇を求めて初めて適者となり、優者となり、強者となることができるなどと言うようにならないのならば、環境を全く異にして生存する人類と獣をひっくるめて、爪と牙で生きる四足の獣の環境と混同するようなことは没論理的である以外の何者でもない¹³。もし四足の獣の環境における生存者を生物進化論のように、人類に見立てるならば、道德家は牙を持たず、知識人は爪がないから、生存競争の劣敗者となるであろうし、最も残忍で暴虐な者が適者となり優者となり、強者とならなければならない。そして丘氏の死刑による淘汰を唱える刑法論などは、ひょうたんから出る駒¹⁴である。

5—4 生物進化論の単位はどう考えるべきか

まさに人類の生存競争は、死刑によって不道德な者を淘汰しているように、その内容には完全に道德的優者、道德的強者の意義があるのだ。説明の順序として、まず今の生物進化論が生存競争の単位を定めないことから論じよう。

我々は信じている。今の生物進化論は、個人主義の独断的な先入観によって生存競争の単位を定めるものであると。我々は、社会主義を生物進化論の発見した種族単位の生存競争、すなわち社会の生存進化を目的とする社会単位による生存競争の事実を求めるものである。この説明では、生存競争の単位となる個体というものの定義が確定される必要がある。そして我々は、生物学者の間で採用される定義を信じたいと思う。それはつまり、ヘッケル¹⁵（生物進化論と社会主義が矛盾することを最も強く主張した学者であって、彼がミュンヘンの生物学者大会で行った演説は、丘博士らの社会主義批評の議論の骨子をなしている）らによって教えられた「個体の階級」というものがその定義である。それは、顕微鏡が発明される以前に「個体」と言う時には、「個々がバラバラで、その中間に空間が存在するもの」と定義したり、「一個の卵から成長したもの」と定義したりする他なかった。こうした定義では、単細胞の分裂によって生じるアメーバなどは、一個の卵子から成長したものではないし、また樹木のような形を作って繁殖する個々の生物が密着した芽生生物¹⁶などは中間に空間が存在しないから、一個体であるのか、一個体の断片であるのか、個体の集合であるのか、どれとも定められない。そのため、この定義は不明瞭極まる観念となる。つまり、個体の定義として中間の空間、あるいは一個の卵というようなものを観念の

13 原文では「若し精神の平調を失ひて、鱒が泥中の優者なるが故に鯛を泥中に投じて窒息せしむべく、鼯鼠が土中の優者なるが故に馬を穴に葬りて生理めにすべしと云ひ、人類も亦蚯蚓の如き蛆の如き境遇を求めて始めて適者たり優者たり強者たり得べしと云ふが如きに至らざるならば、境遇を全く異にして生存する人類と獣類とを一括して、爪と牙との四足獣の其れと混同するが如きは何たる没論理ぞ。」となっている。この文だと「もし～」の後が反語の文章になっているため、文章全体がねじれてしまっている。よって、意識を試みた。

14 ことわざの「ひょうたんから駒が出る」からの表現。道理上、あるはずのないことのとえとして用いる。

15 ドイツの動物学者。

16 「芽生生物」とは、出芽によって繁殖する生物のこと。出芽とは、細胞の一部に小さな突起が生じ、これが次第に成長して母体から離れ、新たな個体を形成することを指す。ヒドラなどがこの増殖の仕方をする。

基礎とすることは、顕微鏡が発明されてからは全く維持できない仮説として捨てられるようになった。「個体の階級」という説明によれば、一個の個体である単細胞生物から分裂した無数の単細胞生物は、それぞれ無数の個体と考えることができる。それとともに、初めの一個体の一部という点から見て、分裂によって生じた単細胞生物を空間を隔てて分子としている一個体だと考えることができるのである¹⁷。つまり、分裂によって生じた単細胞生物は、単細胞生物であるという点において一個体であるとともに、分裂によって生じた単細胞生物を空間を隔てて分子としている最初の単細胞生物は、個体を大きくしたものだと思えることができるのである。芽生生物などは、大きくなった個体が空間を隔てた分子とならずに密着した分子それぞれが生物として一個体であるとともに、樹木が大きくなるように、最初の生物は一個体として大きくなったものである。そして人類などの高等生物も、生殖の目的のために陰陽¹⁸の両性に分かれているから、これを男子として、あるいは女子として、また親として、子として、兄弟としてそれぞれ一個体であるとともに、中間に空間を隔てた社会という一大個体の分子である。今日、真理として唱えられている社会有機体説、国家有機体説はこの点から生まれたものである（この説明は、第四篇の『いわゆる国体論の復古的革命主義』において国家人格実在論を説くのに重要である）。丘博士の『進化論講話』の中では、生存競争の単位である個体の説明をしていないほどであるから、社会主義を生物進化論によって排撃するようになったのはやむを得ないことであろうが、個体の階級を教えたヘッケルが生物学者大会の演説で、「社会主義は生存競争説に従えば、維持できないものだ」と論じたのは奇怪であるとする他ない。生物界を通じて生存競争の単位は、彼らが個人主義によって解釈しているような小さな階級の個体だけではない。一個の生物（人類について言えば個人）は、一個体として生存競争の単位となり、一種族の生物（人類について言えば社会）もまた一個体として生存競争の単位となる。そして個体には個体としての意識がある。——個人が一個体として自己を意識する時、これを利己心とか、個性と言う。社会が一個体として自己を意識する時、公共心とか、社会性と言う。なぜならば、個人とは空間を隔てた社会の分子であるから、また社会とは分子である個人がひっくるめられた一個体であるから、個人と社会は同じものとなるからである。つまり、個体の階級によって、一個体は個人である個体としての意識を持つとともに、社会の分子として社会における個体の意識を持つ。さらに換言すれば、我々の意識が個人として働く場合には個体の単位を個人にとり、社会として働く場合には個体の単位を社会にとり、我々が利己心とともに公共心を、個性とともに社会性を持っているのはこのためなのである。——つまり、公共心、社会性とは社会という大きな個体の利己心が、社会の分子としての個人に意識される場合のもので、分子である個人が小さな個体として意識する場合の利己心も、その小さな個体が社会の分子である点において社会の利己心である。だから、利己

¹⁷ この辺りの説明は、意味がわかりにくい。とりあえず原文に従って訳しているが、意味をわかりやすくするため、今後意味を取り直す必要があると思われる。

¹⁸ 中国の易学では、陰は女、陽は男を表す。つまり、「陰陽の両性」とは男女のことを指す。

心、利他心という対照させて呼ぶことなどは、全く理由のないことであって、むしろ大我、小我¹⁹というほうがはるかに適当であるとわかる。今の生物進化論者において個体についてのこうした科学的知識が欠乏しているわけではない²⁰のならば、個人的利己心という小我だけを認め、社会的利己心という大我を忘れ、個人間の生存競争の事実、社会間の生存競争が個人的利己心によるというようにして、完全に社会的利己心という大我を忘れ、社会間の生存競争の事実、社会間の生存競争を行う社会的利己心である社会性、公共心の存在することを忘れていたとは理解できないのも甚だしい。この個人的利己心も社会的利己心も両方等しいものであり、そこに軽重があってはいけない。しかしながら、それらの利己心が、一方は個人のもので、他方は社会のものであるために、また人類が特に社会的団結によって他の動物を凌駕し、社会的団結を単位として他の社会的団結を組んだ集団と競争してきたために、社会的利己心をより多く必要とし、殊更に公共心、社会性、道徳的本能、神の心などと命名され、特別に重い地位に置かれるようになったのである。肉食獣などの単独で暮らす生物の多くは、一動物としての利己心に基づいた生存競争によってその地位を保ち、菜食獣などの集団で暮らす生物は、社会的利己心に基づいた社会を単位としての生存競争によってその地位を向上させる。生物学が全く進んでいなかった時代のホッブス、スピノザならば、個体を顕微鏡によって考察することなく、空間と卵といった漠然とした思想によって独断的個人主義を抱くようになっても非難するべきではない。しかし、生物学者そのものが、今なおそうした独断を継承し、大方個体の観念について無知である者のように個人的生存競争のみを主張し、社会性による生存競争を忘れていたとは何ということか。

今の生物学者はまさしく玉を抱きながら、それを瓦のように考えている者である。生物進化論が人類に与えた福音は、いかなる道徳論も、いかなる宗教も及ばないものであることに気づかないのだろうか。ダーウィンによって悪魔の声のように響いた生存競争説は、ついにクロボトキン²¹に至って相互扶助の発見となった。つまり、これは個体の高い階級である社会を単位とした生存競争であって、古来の漠然とした道徳的意識に明確な科学的根拠を与えたものである。昔の人は思弁的な考察と、直覚的に社会的本能を認識することによってこれを認識していた。例えば、アリストテレスは「人は政治的動物である」と言い、

19 哲学上の用法としては、「大我」は宇宙の本体として唯一絶対の精神のことを指し、「小我」はそれに対応する自我のことを指す（すなわち、ウパニシャッド哲学でいうブラフマンとアートマンの区別にあたる）ので、この「大我」と「小我」をどう解釈するかが問題である。ただしここでは、北は社会的利己心と個人の利己心の話をしており、そうした哲学的な意味を持たせてはいないと思われる。単に「大きな利己心」、「小さな利己心」という程度の意味で使っているにすぎないのだろう。よって、本文の「大我」、「小我」はその意味でとってもらいたい。

20 原文では「科学的智識の欠亡せざるに非らざるならば…」となっている。この二重否定を直訳すると、「科学的知識の欠乏」を強調する意味になる。しかし、科学的知識が欠乏しているならば、後述する社会的利己心の存在を忘れていたことは、やむを得ないことと理解することになってしまい、文章のつじつまが合わない。むしろ北の主張は、「科学的知識を持ちながら、社会的利己心の存在を忘れていたことは、事実の不当な見過ごしだ」ということにある。北の主張を反映させようとするならば、「科学的智識の欠亡せるに非らざるならば…」となっていなければおかしい。よって、構文上の誤りがあると見なし、意味を修正した。

21 ロシアの公爵で無政府主義者。大正時代にこのクロボトキンについて研究した森戸辰男が休職に追い込まれたことは有名である。

「国家の外にいる者は神か、そうでなければ獣である」²²と言った。社会が常に政治的組織という形で発見されるため、人は天性において政治的組織を作り、共同生活をして存在する動物であるとアリストテレスは定義づけ、それを基に国家を論じた²³のである。そして「国家の外にいる者は神か、そうでなければ獣である」という結論は、人は社会があつて初めて人となることができるという今日の科学の結論を哲学史上最初に書き始めたものである。キケロ²⁴が、「蜂は巣を作る目的のために群れをなすのではない。群れをなす習性があるから、巣を作る時に共同して労働をするだけなのである。けれど、人が社会を組織するのは、全く人の天性によるものであつて、共同の目的のために共同して労働することはこうした天性があるためである。」と言ったことは、クロポトキンが生物学によって説明した原理をはるか昔のローマ時代に一個の公理として残していったものである。この社会的利己心は、社会単位の競争が最も激しかった古代において最も多く要求され、等しく重要な個人的利己心が全く押さえつけられていた。だから、社会単位の競争が落ち着くと、とたんに個人的利己心がそれに伴って頭を上げてくる。ギリシャ、ローマの晩年において個人主義が現れたのはこのためであつて、中世キリスト教による統一の下でなされた社会単位の競争が途絶えとともに、思想・信仰の自由が実現し、政治・経済の独立が実現した。個人の自由・独立はついに偏局的に要求され、個人主義の思想は果てしない²⁵大河となり、ヨーロッパの天地を洗い、その大波の余波は十九世紀の半ばまで波打っていた。そうであるから、この個人主義の大河に浮かんで流れていたホッブス、ルソーの徒が、人類が社会的存在であることを理解せず、ある者は契約以前という自然状態を想像し、「万人の万人に対する闘争」²⁶と言い、ある者は「各人は皆神のような自由・独立を持つ」²⁷と言って、その上に社会契約説を建設したとしても、少しもおかしなことではない。それなのに、生物学によって、人類のみならず多くの動物が個々に生息せず、社会的な群れを作つて存在することを説いている生物学者自身が、今なお彼ら溺れ死んだ者の足にすがつて個人主義の流れの中で溺れているとは何と奇怪なことだろうか。十九世紀の半ばに書かれたダーウィンの『種の起源』が偏局的個人主義の余波を受け、生存競争の単位を個人、あるいは個々の動物に置き、そのために生存競争説が道徳的要求と矛盾する方向に走つたとしても、彼は

22 『政治学』において述べている言葉である。「人間がその自然の本性において国家をもつ（ポリス的）動物であることも明らかである。そして国家をもたない者があるとすれば、もしそれが偶然によるのではなく、生まれつき自然にそうなのだとしたら、それは人間として劣性のものであるか、あるいは人間以上の何ものかである。」（『政治学』『世界の名著8（アリストテレス）』〔中央公論社・一九七二〕六九頁）。なお、同じ箇所において、アリストテレスは、「全体は部分よりも先でなければならない」と述べている（同書六九頁）。

23 原文は、「氏の国家とは社会が常に政治的組織に於て発見せらるるの故にして、実に人は天性よりして政治的組織をなし、共同生活をなして存在する動物なり。」となっている。しかし、これでは文章の主語と述語がねじれてしまつていて、意味が通じない。よつて意識を試みた。

24 原文では「シセロ」と英語読みで記しているが、現在では「キケロ」とラテン語読みをするのが一般的なので、キケロと読む。

25 原文では「澎湃」となっているが、「茫洋」と同じだと思われるので、その意味にとって訳した。

26 この「ある者」は、ホッブズのことを指す。原文で「各人の各人に対する闘争」だが、一般に流布している言い回しに変えた。

27 この「ある者」は、ホッブズとルソーを引き合いに出していることから、ルソーであることは明らかである。この主張は、おそらく自然状態を平和なものとする点と捉える点を指しているのだろう。

生物進化の事実の発見者として従来の天地創造説を破るのに急であったから、その事実の解釈である理論にまで到達することを要求できないのである。個人主義が今日に至って全く維持できないようになった理由は、次のことがあるからである。まず理論そのものにおいて、例えば「人は元来他者をよくだます者である」と断定しておきながら、「契約によって社会を組織した」と矛盾したことを言うホッブスのように、また「人は自然に自由・独立の主権を持つ」と言いながら、圧政的で道理に反した社会を「契約によって組織した」と言うルソーのように、ひどくつじつまの合わないものを根本思想とするからである。またそれだけでなく、生物学の研究により、事実として人が個々に存在していなかったことを示されるようになったからである。今日の政治学、経済学などの社会的諸科学は、人は決して契約のような方法によって社会を作った事実はないとしている。また、人類の社会は他の動物が社会的な群れをなしているように、社会的動物であるが故に初めから社会を作って存在していたという生物学の発見により、従来の思弁的独断から目覚め、その科学の根底から組織を建て替えたのである。そして人類は初めから万人の万人に対する闘争を行う者ではなく、また各人がことごとく神のように自由で独立した存在ではなくて、社会的動物としての社会的存在であるということは、さらに社会的結合が大きく、強い者は社会的利己心すなわち相互扶助による大個体を単位とした生存競争において、他の孤独な存在に打ち勝ったという進化の説明と結合し、個人主義の諸科学をますます価値のないものにしたのである。つまり、人は個々独立しており、社会には個人的利己心のみしかないという仮定から、「資本と労働が共同するよりも各々が破壊し合って、つぶし合うほうがはるかに生産を高める」と論じる経済学、契約以前は自由で独立した個人同士が存在していたと言う断定から、「国家、社会のような結合、団結はやむを得ない害悪である」と説いている政治学には、次のようなことが言える。生物学の発見した「人類があらゆるものに対して優勝者という地位を得たのは、その社会的生物としての社会的利己心、すなわち相互扶助にある」という事実によって根底から覆されたのだと。団結が強い力であることは生物界を通じての原理である。——それはつまり、相互扶助による高級な個体を単位とした生存競争をする草食動物は、個々が独立した下級な個体を単位とする肉食動物に打ち勝って地球に蔓延していると言うことである。特に丘博士に限らず、今の生物進化論者が生存競争を個人間あるいは個々の生物間のことだけだと理解するならば、個々としてははるかに弱い草食動物が肉食動物に打ち勝った理由も理解できないだろう。また、野生の馬が集団を乱さない間は、一頭さえも他の猛獣に奪われることがないといった無数の現象を説明することができないだろう。彼らの理解するとおりなら、牙と爪を持たない人類は、はるか昔の原人時代に消滅したであろうというのが筋ではないのか。そうではないのだ！食人族の野蛮人も食べる肉は個人間の闘争によって得るのではなく、その生存競争の単位は少なくとも戦闘という目的のために共同する共同体である。最も共同しない肉食動物であっても、生存競争の単位はいかに少なくとも相互扶助として雌と子を含めるような形によって暖を取るといって共同扶助を理解していると言える。生物が高等になるに従って、ま

すます個体の階級を高くし、鳥類、獣などの高等生物になると、ほとんど完全に人類社会において見るような広大で強固な社会的結合をした形で見出されないし、社会的結合の高い階級の個体を単位として生存競争をしている。そしてこの高い階級の個体を単位とした生存競争は、その個体の利己心、つまり社会的利己心、さらに言い換えれば、分子間の相互扶助によってのみ行われ、個体が最も大きく、相互扶助の最も強い生物が最も優勝者として生存競争の世界に残る。人類などはその優勝者の中で最も著しい例である。生物学者は己の尊さを顧みる必要がある。社会単位の生存競争とか、相互扶助による優勝劣敗とかいうものは、キリストよりも釈尊よりもはるかに高貴な福音であるということ。生物進化論がこの福音を掲げ、悪魔の知識を残らず根底から覆したため、単に政治学と経済学だけでなく、倫理学の上にも、教育学の上にも、心理学の上にも「社会主義」という金の冠がかぶせられ、人類の思想史は全く新たな光明の差す世界に向かって流れ始めたのだ。まさしく生物進化論は哲学史上未曾有²⁸の大革命であった。我々が社会主義を生物進化論の上に建て、進化論と同じく大々の革命を成し遂げる者だと自任するのは、まさに生物学者が思想界で行ったことを現実の社会で成し遂げようとする意図からだけである。我々は、個人主義の独断的仮定を思想の根拠として生物進化論を解釈している生物学者によって虐待されようとも、生物進化の事実は社会主義を待って初めて説明することができることを見て、喜ばずにはいられない者である。

5—5 丘博士の進化論の誤りはどこにあるのか

我々に丘博士の心の迷いを打ち払い、正しい道へと導かせよ。我々は、博士がしばしば人種競争とか国家競争と言うのを見て、個人以上のある高い単位の生存競争が存在することに考えが及んでいないと必ずしも信じる者ではない。しかしながら、博士は生存競争の単位を定める根本の点である個体の定義さえも決定しなかったほどの不注意を犯しているから、競争の単位が生物種族の進化に伴って拡大していくことを全く理解していないかのようである。つまり以上に説いた、「下等動物の生存競争の単位は最も低い階級の個体すなわち個々の生存競争であるが、高等動物に進むに従い、その競争の単位である個体の階級が高くなり、社会という大個体を最終目標とする分子間の相互扶助に基づいた生存競争に進化する」ということを理解しないのである。それと同様に、この単位の進化は、人類においては特に（人類としての歴史の進行中において）その進化とともにますます拡大していくという「社会進化論」について少しも考えていないようである。こうして博士は、歴史上の革命に対して無神経な冷笑を浴びせ、来るべき革命によって得られる世界連邦論を軽んじ、無知で残忍な帝国主義の讃美者となり果てるのである。

世間の人々は、生物学者である丘博士に対して歴史的知識を要求しないだろう。しかしながら我々は、生物進化論者である博士が、あたかも宇宙循環論をなすもののように歴史の進化を軽視することを怪しむところである。循環論と進化論は互いに相いれないものでは

²⁸ 「未曾有」とは、未だかつて起こったことのないこと。

ないのか²⁹。丘博士は生物進化論を信じながら、人類の歴史は人類という一生物種族が進化した跡であるという社会進化論を信じるならば、歴史上の革命を単に一種の夢想から生じた擾乱の反復であるなどという口ぶりは、進化論者としてあるまじき純粋な循環論の思想である。そして現在の地理的に限定された社会、つまり国家を永久的な生存競争の単位とし、今日の進化の途上において生じた人種の差を永遠に対立し合う単位の競争者であるかのように断定するに至っては、あらゆるものを静的に考えるものであるから、ますます進化論の思想と矛盾する。山腹³⁰あるいは沼、沢に数十、数百人の小さな集団を作り、他の小さな集団と無関係もしくは戦って生存していた原人の村落から、併呑あるいは合併の道に従って次第に少ない人口で占める領域の歴史時代の小さな都市国家³¹が生まれ、さらに種々の征服、分裂の後、今日のような数千万人、数億人を抱える大国家として対立するようになった進化の跡をもし丘博士が顧みるならば、今日の大国家が今のような状態にまで進化してきた原理をたどり、さらに今後より大きな国家にまで進化していくであろうということをも推測せよ。現在の単位においてする国家競争、今日の差別に基づいてする人種競争を見て、直ちに今後の進化を予期して努力している社会主義に対抗を試みるようなことをするのは、生物進化論を理解しない証拠であると言う他ない。

5—6 国家競争の進化

帝国主義の国家競争については後に説く。ただ、我々は丘博士が自身の生物学の立場から帝国主義の裏書人となった態度を見ては、世間を教え導くべき科学者がかえって世間にもっぱら随伴するという転倒したことをしていることを非常に残念に思う。もちろん、博士の言うように、我々には生物学上の事実として変種³²間に生存競争がある。そしてその競争において、多くを闘争に訴えて解決していることを否定するものではない。しかしながらこれは、先に言ったように、生物種族の階級が進化するに従って、その競争の内容を進化させることを理解しないことから来るのである。獣がその変種間において牙と爪で生存競争をしていることはただそれだけの事実であって、人類という他の生物種族の階級における変種間の競争を、同じような方法でしなければならぬということとは別問題である。そして人類の過去及び現在において、異人種、国家間の生存競争が戦闘によって行われてきたとしても、最初³³がそうであっただけのことであって、人類の進化とともに人類の生存競争の内容がさらに進化し、他の方法によって優劣を決定するようになるか否かは別問題

²⁹ 意味がよくわからないが、北に言わせれば、循環論と進化論は相いれないらしい。おそらく循環論はサイクルとして捉えられるのに対し、進化論は比例の直線で捉えられると北は考えていたのだろう。

³⁰ 山腹とは、山の頂上とふもとの中間に位置する所。

³¹ 日本でいうと、弥生時代前期の「クニ」に分かれていた時代のことを指しているのであろう。ちなみに、ここは原文では「小き小国家」となっているが、「小」が重なってしまうと文章としてすわりが悪いので、意識して変更した。

³² 生物は、種一亜種一変種という分類の仕方では分けられる。ここでは、生物の分類上の一階級（亜種の下に必要に応じておかれる）のことを指している。ちなみに、この原文は「固より吾人は生物学上の事実として変種間に生存競争あり。」となっているが、このままでは言葉が足りず、意味が通じにくい。よって、意味を補って訳した。

³³ 原文では、「・」と表記され、「ママ」と注記されている。文脈からすると「はじめ」と読ませていると思われるので、その意味にとって訳した。

である。社会主義の戦争絶滅論は、生物種族は進化に伴って競争の単位を拡大していくという一つの理由から、人類種族が生存競争の単位として他の生物種族に対して完全な優勝者となるだろうから戦争が不用になると考えるのである。またそれとともに（後に説くが）、人類単位がそれに到達するまで生物種族は進化に伴い、競争の内容を進化させていくという他の理由から、国家競争を連邦議会の弁論によって決定するようにさせようとするものである。もし丘博士のように、利害の対立を直ちに戦争の不滅に推し及ぼそうととして、県会議院内において田舎紳士団諸君³⁴が行う雄弁を国際戦争における死体の山、血の河になぞらえるような雑な推論をせず、地方間の利害の対立が戦争によって決せられた段階から進んで県の多数決で決せられるようになったように、今日の国家間の利害の対立がまた今日のような戦争によらずに連邦議会の決議によって決定するようになることと推論するならば、生物進化論を掲げて社会主義を排するような失態はなくなるだろう。丘博士は歴史の進化を無視し、あたかも刺殺し合う進化論と循環論を混在させているように、全く相いれない社会主義と帝国主義を混在させているのだ。社会主義の戦争絶滅論は、世界連邦の建設によってそれを期待し、帝国主義が夢想する最終局面は、一つの人種が支配する一つの国家が他の人種、他の国家を併呑、抑圧して対抗できないようにする平和にある³⁵。これは、歴史上多くの英雄に指導された民族がやってきたことであって、かつておごりに満ちたドイツの皇帝が夢見ていたものである（ドイツ皇帝は他の国家の強大さ³⁶と国内の社会党の勢力のため、今は世界を統一しようとする帝国主義を放棄したと伝えられる）。それなのに、丘博士という人物は社会主義の万国平和の理想に対して、「仮に一人種が他の人種に打ち勝って世界を占領したとするも、場所場所によって利害の関係が違えば、たちまち争いが起こって数ヶ国に分かれてしまう。」と非難する。これは何ということであろうか。これは帝国主義の主張であって、社会主義が力を極めて排斥している空想である。もちろん、循環論的思想を持つ博士の言うように、歴史は繰り返すものではない。したがって、征服によって統一した後には分裂したとしても、その分裂は以前の統一されていない状態よりもっと大きな単位で対立し、もしくはもっと大きな単位となるようにするために小さな単位に分裂するのである。歴史に意義のないものはない。この点において、今日までに行われた国家競争は征服、併呑の形によって社会を進化させた——つまり、社会学者のいわゆる同化作用によって個体の階級を高め、今日までの大国家に進化させたことは言うまでもなく事実である。故に、我々は帝国主義を歴史上において最も力のあった社会進化の道程であることを強く認識している。しかしながら、同化作用とともに分化作用もある。外部的な強制力によって同化する他なかった国家競争の進化は、他の進化である分化作用によって同化作用を阻害され、また外部から同化作用を強迫されるために分化作用が圧迫され、

³⁴ 原文では「田舎紳士諸君」となっている。「田舎」は田舎紳士のこと。「紳士」をどう訳すか迷ったが、田舎で「長州閥」といった大規模なものを作っていたとは考えにくいので、「集団」の意味にとった。

³⁵ 要するに、社会主義も帝国主義も平和を求めるのに違いはないが、その平和が成立する状況は全く異なるという意味である。なお、北は手段として帝国主義を否認するわけではない（そのことは第五篇で語られる）。

³⁶ この「他の国家の強大さ」とは、おそらくイギリスのことを指しているのであろう。

非常に遅々とした社会の進化であった。——社会主義の主張する世界連邦は、国家、人種の分化的発達の上に世界的同化作用を働かせようとするものである。だから、自国の独立を脅かす者を排撃するとともに、他の国家の上に自己の同化作用をむりやり及ぼすために行われる侵略を許容しない。——この点において、社会主義は国家を認識し、したがって国家競争を認識している。我々は生物進化論を唱えたダーウィンと同時に社会進化論を説いたマルクスの偉大さ³⁷を尊ぶのであるけれど、彼らよりも進化した現代人として彼らの言葉を信仰個条とする者ではない。階級競争とともに国家競争を事実のままに認める者である。階級は横断的な社会であり、国家は縦断的な社会だからである³⁸。しかしながら、同化作用によって階級間の著しい格差が次第に一掃され、小さな国家の対立が歴史の進化によって消滅するとともに——つまり競争の単位である個体の階級を高めて進化するとともに——さらにその競争の内容を進化させることを見過ごしてはいけない。社会主義の世界連邦論は、この競争の単位を世界的な単位に進化させるとともに、国家競争の内容を連邦議会の議決に進化させようとするものである。階級闘争は当初競争を決定する政治機関でなかったため、常に反乱と暗殺という方法によって行われてきたのだが、今日内容を進化させて競争の決定を投票に訴えるようになった。それと同じように、未だ競争を決定する政治機関がないため、現在の国家競争が今なお外交の権謀術数³⁹と戦争による殺戮という方法によって行われるものを、今後は階級競争の解決と同じく投票によって決するために世界連邦論があるのだ。もちろん、同化作用が階級間で行われるように国家間で行われて、階級闘争が絶滅するように、さらに一段と進化を遂げて連邦間の競争が全く絶滅し、人類が一国の黄金郷に至り、全人類を同胞とする同化作用とともに障害なく発展する個性の分化作用によって社会を進化させるようになったとしても、社会主義が実現されてしばらくのうちに連邦議会内における利害が全く一致するとは想像できないだろう。社会主義は帝国主義のように、ユートピア的な世界統一主義の空想ではないからである。丘博士が県会議員の激論に対照させたいと思うならば、決して国際戦争をそこにあててはならず、この連邦議会内における各国代表者の演説、問答をあてるべきである。利害の対立を直ちに戦争不滅論に帰結したいと思うならば、県会議事堂内の発砲、抜刀を前提としてからでなければならぬ。そもそも、比喩をもてあそぶことは科学者として厳に謹むべきことである。

5—7 新たな創造説と化した進化論

考えてみれば、人種競争論を残忍で無知な口ぶりで主張する者の多くは、文明人と野蛮人を先天的に異なるもののように信じるといふ先入観を持つ者である。もし丘博士がこうした先入観を持つならば、これはゆゆしき事態であって、丘博士はダーウィンによって打

³⁷ おそらく、マルクスが資本主義体制から社会主義体制に移行し、やがて共産主義社会が成立すると主張したことを指すのだろう。ただ、マルクスがこれを社会進化論と同じニュアンスで語ったかどうかは不明である。

³⁸ よく意味がわからない。社会を表す際に階級を横軸、国家を縦軸にとるといふことだろうか？ とりあえず原文のとおり訳した。

³⁹ 原文では「隠謀譎詐」だが、最近では見慣れない表現なので、わかりやすい表現に改めた。

破された天地創造説をとる者である。後にも説くように、今の生物進化論者の多くは、特に天地創造説を無意識の間に継承し、思想の中枢を作っている。文明人は天地が始まった時から文明人だったわけではない。野蛮人は地球が滅びるまで野蛮人として命を終えるように創造されたものではない。野蛮人であっても、文明国の空気の中で育てば文明国の人間に劣らず十分に発達するし、文明国人と称される者であっても、子供を捕まえて野蛮人の村落に置けば、完全に野蛮人として停滞するだろう。「人はただ社会が存在することによってのみ人となる」。我々が前編の倫理論において述べたように、人は境遇によっては狼にもなる。そうであるなら、人の取り囲まれた社会的環境が文明社会である時は文明人として作られ、野蛮社会である時は野蛮人として作られるということは、容易に想像できるであろう。我々は文明社会に育てられ、原人の野蛮時代から今日に至るまでの十万年間と計算される長い期間にわたって集められた知識を二十歳に至るまでに吸収し、体得して文明人となっているのである。ある周囲の環境によって依然として原人の状態にとどまっている、もしくは原人の状態から我々と異なった方向に進化した社会的環境に囲まれているため、野蛮人は死ぬまで何ら吸収すべき知識が社会に存在しないので、常に野蛮人の生活を繰り返しているだけなのである。我々の遠い祖先である原人が火を発見するのにどれほど長い進化を要したかもわからないというのに、我々は母の乳房を口に含みながら、驚くべき石油の発火と電気の発光を眺めているではないか。十進法⁴⁰などがいかにはるか後代の発明であるかもわからず、この発明のおかげでいかに人類の知識が整頓されたかわからないというのに、我々は五、六歳の段階でそれ以上の高等な数学を知っているではないか。我々の暮らす地球が自転しながら太陽の周囲を公転していること⁴¹、丸いことを事実として知ったのは、わずか五、六百年前、つまり原人時代の初めから計算すれば九万九千五百年の後である⁴²が、我々は十二、三歳の小学生にしてその理由までも明白に理解しているではないか。コロンブスという船長とワットというかま焚きを乗せ、社会的、歴史的知識を満載した大きな蒸気船がダーウィンを乗せて世界を漫遊する旅路に船出したため、生物進化論は発見されたのである。そして我々は、今この筆を使ってこの驚くべき知識を論議しているのではないか。——文明国の人間は文明国の人間としての肉体的遺伝の他に、文明の知識の社会的遺伝により、文明国の人間として作られるのである。我々文明国の人間は、生まれながらの肉体によって文明国の人間となっているのではなく、こうした歴史的知識を遺伝させている社会に置かれ、その知識を受け入れることによって文明国の人間として作られるのである。野蛮な村落の子供が文明的教育の下で育てば、ほとんど文明人と肩を並べられるほど知識、道徳の発展を成し遂げるといふ幾多の事例は、進化論を個人主義に

40 原文は「十進数」となっているが、おそらく「十進法」のことだと思うので、そう改めた。

41 原文では「地球の動きつつ太陽の周囲を繞ること」となっているが、わかりやすくするため、意味を補って訳した。

42 原文では「円形なることを事実において知りしは僅かに五六百年前、即ち原人の始めより計算すれば九万九千五百年の後において漸く得たる智識なるも」となっている。しかし、「漸く得たる智識なる」という表現は不用であり、むしろ文章をねじれさせる原因となっている。よって、これを削除して本文のように訳した。

よって解釈している代表的学者とも言うべきベンジャミン・キッドの『^{ソーシャル・エボリューション}社会進化論』⁴³においてすら無数に引用されているのを見よ。我々は、「人はただ社会が存在することによってのみ人となることができる」という事実だけで、今日の程度まで分かれてきた人種の分化的発達⁴⁴による遺伝の相異を軽視しようとするものではない。しかしながら、ただ一切を肉体的遺伝だけに帰して、社会的遺伝、つまり知識の歴史的集積を忘れ、「南洋のある土着民は十以上の数を数えようとする」と頭痛を起す」と言うような事例を挙げて反証しようとする者がいるならば、我々は多大の尊敬を払いながら以下のように答えよう。それは年老いて中枢神経が衰弱したためであって、博識の野蛮人の長老が、獣教の生存競争がいかにも誤っているかを説いて聞かされても、死ぬまでその正しい知識を理解する機会がない⁴⁵の同じ現象であると。そうではない！ 遺伝そのものが生物進化論によって種族的知識を継承する本能である。

しかしながら、現在のような野蛮人が、永久に科学者の興味ある材料として地球に存在するものでないことは言うまでもない。我々は、社会主義者として人類同胞の理想と同胞であることに基づく知識を人類一元論によって持っているのである。しかしながら、事実は事実として人種差別を認める。——誤解してはいけない。我々が下等人種の消滅を主張するのは、従来のような駆逐あるいは殺戮という形をとった人種競争によるのではなく、下等人種それ自身が文明に進むことによって野蛮人としては消滅し、もしくは冷酷な生存競争の法則によって野蛮人としての現状を維持することができなくなり、消滅するだろうという点にある。我々は涙を流して行かう人道論とは無関係に、社会進化の理法と理想によりて社会主義を説くのである。進化は一つには生存競争による。社会進化の途中、相互扶助の道徳がない無数の個人を劣敗者として淘汰しているように、文明の進行に並行して進むことができない人種が滅亡していくことはどうしようもない。人類という大社会は地理的小社会の上に超越して一つの大きな個体となっているのである。小社会の進化が真、善、美⁴⁶の点で劣った個人の淘汰によって得たように、大社会の進化においても真、善、美の点で劣った人種が淘汰されることはどうしようもない。——しかしながら、野蛮人の中で文明に進むことができない者が野蛮人として消滅するということと、文明人が野蛮人を圧迫して滅亡させる権利があるということとは全く別問題である。生存競争の内容は、生物種族の階級の進化によって進化するように、人類種族の歴史が進化するに従って進化する。相互扶助の道徳がない個人はかつて死刑によって淘汰されたが、今はそれから進化して他の競争の方法によって滅亡しているように、駆逐あるいは殺戮という形によらず、人種間の生存競争は今日の正義の理想と矛盾しない方法によって行われるだろう。滅亡の名に戦

43 原文では「ソシアル・エボリュション」となっているが、現在の書き表し方に改めた。

44 原文では「分科」となっているが、ここだけが「分科的発達」になっている。おそらく「分化」の誤りであろう。

45 原文では「移るの期」としか書いていないので、意味が不明確である。とりあえず意識してみたが、北の論調を適切に表現しているか自信がない。他日、訳を見直す必要があると思う。

46 人間の理想として、認識上の真、倫理上の善、審美上の美の三つが普遍妥当な価値とされる。これは、そのことを指している。

慄を覚えてはいけない。個人として、また人種として社会性の欠乏した者が淘汰されなければ、どうやって「類神人」がさらに高度な進化をできようか。民族あるいは国家が小社会としての個体で、したがってその分子として不適格な個人が淘汰されても、他の分子である個人が適者として進化しているならば、それらを分子とした社会という個体から見れば、滅亡ではなく進化である。それと同じように、進化に随伴することができない人種が消滅するのも、他の人種が進化して神の領域に入るならば、これを人類一元論による大個体という点から見れば、決して滅亡ではなく、喜ばしい進化である。——個人主義の人道論を唱える者にとって、このような断言は冷酷に響くだろう。そう、冷酷である。冷酷な生存競争の法則は、「類神人」としての環境に不適格な、真理を得ず、善を持たず、美を持たない者を劣敗者として残酷に淘汰する⁴⁷。ここに至ると、社会主義というものも、あたかもキリストの名のために十字軍の犠牲を敢えて出したように、限りない個人と人種の死体の上に「神」をまつるために数万の劣敗者を穴に葬る。しかしながら、さらに後に説くように、個体は死ぬものではない。一元的な人類という大きな個体は、その不適格な分子を淘汰するが、他の分子によって生き、それにより無限の天に進化していく。つまり、分子自身の進化によって真を得て、善を持ち、美を持つことによって、真を得ず、善もなく、美もなかった分子として消滅するとともに、また永久に真を得ず、善もなく、美もなくして進化することができない分子は、他の真、善、美を兼ね備えた分子によって生き、それにより進化ができる。それなのに、この生存競争というものを直ちに相互の殺戮と速断するために、丘博士のような死刑による淘汰を唱える刑法論が現れ、生存競争は無知で残忍な人種競争論となるのである。人類は有史時代に入ってから⁴⁸も生存競争の内容を進化させ、したがって正義の内容を進化させてやまない。もし今日の社会意識が極めて鋭敏になり、同胞を困窮させるに耐えられなくなるまでに進化した正義があるにもかかわらず、なお無知で残忍な人種競争論を振りかざして、不幸な彼らに圧迫を加えてよいとする学者がいるならば、我々は実際に尋ねよう——人類は胎児の九ヶ月間に魚類の時代を経験し、獣の時代を経験し、そして生まれて人類となるが、子供の間は野蛮人である原人時代を繰り返しているから、墮胎などは魚を釣り、獣を射るのと同じなので、死刑による淘汰を唱える刑法論の外に漏れるではないか。また軍艦を用いて遠い熱帯に行くよりも、どうしてまずあなたが産んであなたの膝下に置く野蛮人から殺戮の手を下さないのか。極端な野蛮人ですらそうなのだ。それなのに、どうして単に皮膚の色を異にするという理由で殺戮し合うのかと。

5—8 従来の進化論における生存競争論の誤り

47 原文は「冷酷なる生存競争律は『類神人』としての境遇に不適なる所の真ならざる善ならざる美ならざる者は劣敗者として残酷に淘汰す。」となっている。「…美ならざる者は」という主格ではなく、「…美ならざる者を」という目的格でなければ、最後の「淘汰す」と整合しない。よって、その意味にとって訳した。

48 原文では「其の歴史に入りてよりも…」となっているが、これでは意味がわかりにくい。ここでの「歴史」は、有史のことを指していると思われるので、それを明確にした。

死刑による淘汰を唱える刑法論といえどもまたそうである。もし丘博士及び国家の刑罰権を生存競争によって解釈している刑法学者のように、改心の見込みのない者は人種の改良のために死刑に処すべきだと論じれば、その論理によって回復の望みのない老親に毒薬を盛って殺しても、国家の刑法は処罰できないということになる。人種の改良、進歩のために再犯、三犯の者はいっそう死刑を盛んにして殺せと言え、その論理を突き進めると、人種の改良、進歩を最も阻害する肺病⁴⁹の患者を収容している病院内に断頭台を設けるといふ企てをしなければならなくなる。人種の改良、進歩のために容姿の醜い女や愚かな男⁵⁰などは酌量減刑もなく死刑に処さなければならず、人種の改良、進歩に害をもたらす学者などはロバのようにつないで、処刑場に送らなければならない。人種の改良、進歩は、一つには生存競争にあることは言うまでもないが、生存競争が必ず死刑によって行われなければならないという道理はない。——社会という一団体の中において、その中にいるある分子の上に、他の分子もしくは分子の集合体が殺戮を行うということは、偏局的社会主義時代の一般的な良心ではあったが、今日も正義というわけではない。偉大な分子が他の分子もしくは分子の集合体によって犯罪者とされ、死刑に処された著しい例はあのキリスト、ソクラテスにある。前編に述べたように、犯罪とは一般的な良心に背くことをいう。一時代の一般的な良心は、必ずしも次の時代において一般的な良心となるわけではない。次の時代における一般的な良心の多くは、一時代の一般的な良心によって犯罪視された先見の明⁵¹のあった特殊な分子によって作られる。今日偏局的社会主義時代の良心により、ある分子の上に、他の分子もしくは分子の集合体が殺戮する権利があるとの主張は、まさにローマ法王が学者と学説に対して持っていた刑罰権を復活させようとするものではないか。ダーウィンをガリレオに代えてあの時代に生まれさせよ。『進化論講話』が中世のイタリアで書かれたとせよ。生物進化論者は、自己の論理によって絞首台に上らなければならない。丘博士は刑法学について豊富な知識を持っていないだろう。しかしながら、万物の進化の大権がどうして特殊な個人の手の中で握られているかを疑うべきではないのか。

ともかく、人類種族の生存競争は、死刑による淘汰を唱える刑法論が今日残るように、全く道徳的内容を持ったものである。これは人類のみに限らない。草食動物など群れをなして生存し、社会単位の生存競争に従っている全ての生物に通じる競争である。下等動物などは生存競争の単位が最も下級な個体であるため、内容が個別的利己心によるのであって、動物の高等な段階に進むに従い、単位が次第に拡大して高級な個体となるため、社会的利己心、つまり社会性による道徳的内容を持った生存競争となるのである。故に、個別的利己心による肉食獣においては牙と爪が優劣を決定するが、社会的な群れをなす一般の草食動物においては社会性の発達したものが優者、強者であって、小我の利己心だけで社

49 肺結核のこと。

50 原文では「痴漢」となっている。「痴漢」には「愚かな男」という意味と、現在もよく用いる「痴漢」の意味がある。どちらに訳してもあまり問題はないが、その前の容姿の醜い女（原文では「醜婦」）との関係を考慮すると、「愚かな男」と訳しておくのがよいだろう。

51 原文では「先覚」が使われている。「先見の明」とは若干意味が異なるが、「先覚」では耳慣れないので、敢えて言葉を改めた。

会の団結を害するものは生存競争の劣敗者として淘汰されるのである。あの象などは、自分たちの社会の平和を害するものを群れから放逐するようで、猿の社会では姦通のようなことを最も厳罰に処すそうである。アリ・ハチの社会における道徳的淘汰⁵²は誰もが知っている所であろう。そして人類は最も大きな社会を組織した道徳的生物である。だから、道徳的生存競争は死刑によって淘汰されるほど強烈に行われる。

まさに、人類は遠い昔の原人時代から道徳的生物だったのである。我々は、こう断定したいと思う。個人主義時代の学者が、契約以前の状態は万人の万人に対する闘争状態であったと想像したような嘘偽りはもちろん、原人はもっぱら殺戮のみをしていた純粋な食人族だったと言うような推定は、もはや捨てられるべき根拠のない仮説にすぎない。つまり、当初の原人の状態を漁業、狩猟時代と想像し、魚や鳥を殺すことから食人を学んだのだらうと推論したとしても、それははるかに後のことであって、漁業や狩猟に必要な道具を発明するまで進化していない間は、豊かで尽きることのない肥沃な大地で育った天然の産物を採って平和に生活していたと言うほうがはるかに合理的な推測であると信じる。もし原人が食人族だったのなら、あの原人時代を短い年月の中で繰り返している子供が、その獣が座る時にするように足の裏を合わせて座ると同様に、一度は必ず残酷な性格を表さなければならない。それなのに、事実は全く正反対であって、神の笑いと称されるように、子供の時期は最も平和であり、最も臆病ではないか。そしてこの子供の平和と臆病さは、原人の平和な生活と雷鳴、風雨、猛獣、鬼神、暗黒などに対して無数の恐怖を抱いていた原人の臆病さを説明するものであると見ることができる。我々は信じている。根本の誤謬は、今日の野蛮人を直ちに原人と名付けて、我々の原始時代をそれによって推し量ることにあると。闘争と食人は、飢餓に苦しむ民族と気候によって乱暴になった性格を持つ民族のみに限られる。今日の野蛮人の中で闘争や食人が慣習として盛ん⁵³だからといって、全く環境の異なった幸福な環境に置かれ、天と川の底ほどの差のある発達をした今の文明人の原始時代を野蛮人の生活から推し量ることは、人種の分化的な発達を認める者がすべきことではない。人類は今日肉食を時折行っているが、それはまた等しくはるかに後代のことであって、今日の猿とともに類人猿から分化した原人の当時においては、純粋な草食動物として豊かな平野で社会的な群れをなして生存していたであろう。なぜならば、社会的な群れをなす草食動物は、孤立した生活をする肉食動物に打ち勝ち、今日のように地球に蔓延しているということが生物学上の事実であって、人類が今日の猿よりも虎のようなネコ科⁵⁴に近い血系を持つのだと信じない限りは、原人が猿のように平和に群れを作らず、虎のように殺し合っていたというような想像は根拠のないことである。いや、虎といえども虎と虎の間においてはみだりに殺し合いをせず、後に食物競争について説くように、生存競争における意識的な相手は草食動物であって、虎の生存競争は食物にしようとする生物種

⁵² 何を指しているのか不明。働かない者を追い出すということだろうか？

⁵³ 原文では「風盛」である。「風」には「慣習」という意味があるので、本文のように訳した。

⁵⁴ 原文では「猫属」となっているが、虎はネコ科の動物とされるので、「科」に修正した

族と食物となる生物種族という異種族間でなされる競争である⁵⁵。間接的、無意識的に行われる同一種族の食物に対して同種族間で起きる個々の競争などは、食物が少ないために重複した欲望が衝突する場合以外には起こるものではないからである。その通りであるならば、虎のような牙と爪を持つ肉食獣さえも食物が十分な時に互いに争わないならば、豊かな天然の産物の中に置かれたと推定される原始人が、虎でさえ互いに争わないという食物が余りある状況においてもつばら闘争し、人を食べる非社会的生物であったとは、まさしく考えられないことである。堯・舜の時代とはこうした原始時代のことを言うのだ。

それなのに、人口が増殖するとともに、豊かで肥沃な大地は狭くなり、ある者は漁業、狩猟をする時代に入り、ある者は遊牧をする時代に進み、それにより漁場と牧場を求めて激しい生存競争を開始した。そしてこの競争は村落を単位とした、つまり小さな社会単位の生存競争であって、村落の各構成員の相互扶助が最も強く要求された。各構成員の独立・自由は一切無視され、村落の生存競争が素朴な彼らの頭脳で人生の最終目標として意識されるようになった。——この意識は、原人の「自然のままにしておけば、自然と感化される」⁵⁶と言われる無意識的、本能的社会性が、生存競争の社会進化によってまさしく覚醒した道徳的意識として呼び起こされたものではないか。漁業、狩猟時代、遊牧時代の殺伐とした闘争を見て「道徳のない状態である」と速断するようなことは、幼稚極まる思想であって、この村落間の闘争のために我々は初めて社会的存在であることを意識することができたのである。これはつまり偏局的社会主義時代の古代のことであり、社会単位の生存競争のために個人の自由・独立は全く踏みにじられ、社会の名においてする社会の一分子もしくは分子の集合体⁵⁷の意志によって、当時の一般的な良心に不道徳であると認められた者は、実に軽率で残忍な方法による死刑で淘汰された。あの偏局的社会主義時代のルイ十四世が「朕は国家なり」⁵⁸と言ったのは、皇帝その人が社会の分子であるとともに、社会の全てであった⁵⁹からである。その皇帝という一分子だけを国家であるとし、他の全ての国家にいる分子は、国家である皇帝の利益のために存在する。そして皇帝の存在によって忠順に従う道徳的義務が愛国の義務と一致し、皇帝に不忠な者がすなわち国家に対する反逆者として取り扱われるようになったのである。この偏局的社会主義による道徳的淘汰は、原人の時代から有史後の中世史が終わるまで続き、また現在においても目の前で行われている。ギリシャ、ローマの建国当時においては、民族単位の偏局的社会主義が隆盛を極め、あのソクラテスをも毒殺した（そしてそれが民主国家であったために、ルイ十四世のように一分

55 原文は「生存競争の意識的な対敵は食物にせんとする生物種族と食物たる生物種族との異種族間の競争にして…」となっている。しかし、これだと「対敵」について書き出しながら、「異種族間の競争」であると述べており、主語と述語が一致おらず、文章がねじれている。よって、意味を補い、文章が通じるようにした。

56 原文では「無為にして化す」となっている。これは、『老子』の第五十七章にある言葉である。

57 原文では「社会の一分子若しくは分子の集合」となっている。おそらく、一分子とは君主、分子の集合とは貴族の合議体のことを指すのだろう。

58 ルイ十四世が述べたと言われるが、実際はそうではなく、単なる逸話である。

59 この理解が、第四篇で展開される政体論に受け継がれている。

子が国家ではなく、分子の集合意志が国家の意志であった)⁶⁰。中世の暗黒時代における封建的区画を単位とした生存競争が激しかったため、貴族階級を組織していた分子の意志に反する者は、社会の反逆者として最も軽率で残忍な死刑という方法で淘汰され、自由・独立を保っていた者は社会の意志を表示するという君主もしくは貴族の階級だけであった。下層階級の個人は、全くその権利を認識されなかった。あの「敵国や外患がなければ国は滅びる」という素朴な歴史哲学は、まさに古代及び中世を通じて民族あるいは地理的に区画された小社会を単位として生存競争をなし、その生存競争の単位である国家のために（実際には、国家の意思の宿る所である社会の一分子もしくは分子の集合体のために）、個人が存在していることを示すものである。フランス革命前後の個人主義の独断的仮定によって生存競争を解釈しては、人類種族の歴史、つまり社会進化論を全く説明することができない（この説明は後に国家の本質及び国家の意志を説くにあたって重要である。『いわゆる国体論の復古的革命主義』を見よ）。

5—9 生存競争の単位

しかしながら、社会の進化は同化作用とともに分化作用による。小社会の単位に分化して衝突、競争していた社会単位の生存競争は、衝突、競争の結果として征服、併呑という方法で同化され、同化によって社会の単位が拡大すると、さらに個人の分化によって個人間の生存競争となり、人類の歴史は個人主義の時代に入った。あのギリシャ、ローマの末年において個人主義の兆しがあったのは、まさに征服、併呑による同化作用によって社会の単位が拡張したのと同時に、社会単位による生存競争が静まったからである。それは、競争を分化的発展させるという要求の目覚めであったが、当時たまたま社会単位による生存競争をしていたゲルマン民族に滅ぼされ、偏局的社会主義の中世史という暗黒の中で芽を出さずに経過した。しかし、さらに封建的区画に応じた小社会単位においてする生存競争がローマ法王の教会権力の下で同化されると、その芽は個人主義の大潮流となって、個人の分化作用によって社会を進化させる時代に至ったのである。そして波のような形をした運動によって起こる社会進化の法則により、あたかも天地創造説が人類の地位を神の子であるとしたのに対して、生物進化論が人類を獣の仲間であるとした。それと同様に、社会の一分子である個人が他の分子である国王、貴族のために犠牲になっていた階級国家を打破するため、個人の価値が最終目標として認識され、社会国家などは個人の自由・独立のために組織され、個人の意志によって解散することができる機械的な人工物であるとするようになった。「個人は目的であり、手段であってはいけない」⁶¹というのは、個人主義の精神であった。ダーウィンの主張した生存競争が完全に個人単位の生存競争だけからなっていたのは、この偏局的個人主義の余波に漂わされたためであって、丘博士及び一般の

⁶⁰ 原文は「彼のソクラテスをも毒殺し(…)。」となっており、文章の結びをしていない。かっこ書きを加えたために、それを忘れてしまったのだろう。よって、語を補った。

⁶¹ カントは「人間を手段としてのみ取り扱ってはいけない。」と述べていると言われる。本文中の表現は、カントからとってきたものだろうか？

生物進化論者は、今日に主張している生存競争とは、はるかに後代の歴史的過程のものであることを知るべきである⁶²。

この社会単位の生存競争と個人単位の生存競争は、社会進化論を偏局的社会主義と偏局的個人主義の二本柱として建設されたものである。そしてこの二本柱が、ある時は長くなり、ある時は短くなることによって動揺しながらも支えられてきた社会進化は、この二本柱に並行して建てた社会民主主義の理想により、初めて確かで速い調子で進化するだろう。社会民主主義は社会の利益を最終目標にするとともに、個人の権威を強烈に主張する。個人というのは社会の一分子であり、社会とはその分子そのものことであるから、個人すなわち社会なのである。これを偏局的個人主義時代の機械的社会観のように、個人のみが実在するものであり、社会はその個人が集合してできた関係もしくは状態であると解釈しては、「個人は目的であり、手段であってはいけない」という言葉は意義がないが、個人が社会の分子として社会そのものである以上、個人の目的は社会の目的であるべきなのである。——社会主義はこの意味において個人主義を継承する。しかしながら、分子である個人は、その死とともに滅亡する。だから、分子である個人そのものを最終目標とした時、目的は五十年⁶³の後に終わりを告げてしまい、意義がない。故に、個人の自由・独立は社会進化の最終目標の下において厳粛なのである。また偏局的社会主義のように、社会の分子である個人の自由・独立が他の分子もしくは分子の集合体の下で踏みにじられては、君主もしくは貴族らの権力階級の意志が絶対不可侵であるために、個人の分化作用によって行う個人間の生存競争によって社会の良心の中身を豊富にすることができない。したがって、社会の生存を最終目標としても、非常に遅い社会の進化しか期待できなくなる。つまり、社会は社会の全分子の上に幸福、進化をもたらすことができず、社会のある階級の分子だけが自由・独立を得るだけで、その他の下層階級はそれらの分子の栄華、幸福を築くための完全な礎石となるにすぎない。社会の進化は同化作用とともに分化作用による。分化作用を完全に行わせるのに不可欠な個人の自由・独立が（君主国時代においては）君主もしくは（貴族国時代においては）貴族階級の少数に限られ、時代の進化を急激なものにすることができなかったことはやむを得ないことである。今日及び今後の民主国時代のように、全国民がことごとく自由で、独立することが認識され、分化作用を大多数によって行うようになってから、社会が驚くべき勢いで進化し始めたことはまた当然のことなのだ。まさに社会主義は個人主義なしに高貴になることができない。感謝すべきなのは個人主義が発達したことである。

5—10 進化論から見た個人主義と国家主義の意義

願うことは、今の個人主義者と国家主義者が、現代社会の状態について一別することであろう。経済的貴族らが（地主ならば）各地方、（資本家ならば）各職業に群雄諸侯のよ

⁶² 文意が判然としない。「ダーウィンの進化論は過渡的なものであるということ認識すべきだ」ということだろうか。

⁶³ 当時の日本での平均寿命は五十歳をきっていた。

うに割拠し、国家の経済的源泉を略奪し、彼らが国家の分子として国家の幸福のために努力する義務があることを忘れ、あたかも国家を手段のように取り扱う。——国家主義者という者は、こうした現状に甘んじていることができるのだろうか。経済的貴族だけが経済的に独立して、個人の自由を好きなように主張しているが、経済的武士階級、経済的農奴階級はひたすら彼らに奴隸的服従をして、フランス革命以前のように個人の権威というものを地に払いさらされている。——個人主義者という者は、こうした現状に何の疑問も刺激されないのだろうか。我々は嘆きと涙で社会主義を説くのではなく、科学的宿命論の上に理論だけを主張するのである。故に、今日までの経済的貴族国時代を悪とし、誤謬とするようなものではない。社会進化の当然の道程として、社会の全分子が幸福に浴することができないため、ある階級の分子だけがまず経済的に独立し、政治的、道徳的自由を得たものであることを認識する。しかしながら、これは一つの過程のことであって、もちろん永遠のものではない。かつて貴族が武力によって他の分子の犠牲の上に権威を築いたが、社会の進化とともに犠牲の分子であった下層階級が自由・独立を得て、社会の全分子に法律上は政治、道徳の自由・平等を普及させたように、経済史が進行する過程の一つとして今の経済的貴族階級だけが経済的進化に浴している。しかし、さらに土地、資本の公有による経済的進化とともに、今日犠牲になっている下層階級である経済的武士階級、農奴らは経済的自由・平等による政治的、道徳的独立を得るだろう。——個人主義者という者はどうして再びフランス革命を繰り返さないのか。国家主義者という者もどうして維新革命を繰り返さないのか。現代が貴族政治の経済的階級国家であることを厳格に理解せよ。階級国家を打倒した維新革命の国家主義は、「その最高の所有権」を振るって経済的貴族らの土地、資本を国家の手に移し、貴族政治を一掃して民主的立法を与えたフランス革命の個人主義は、自由・平等論を叫び、経済的貴族らの生産における専制権力を民主的合議制に変えなければならない。国家と個人の名で我々の純正社会主義を迫害するとは何事か。

まさに国家主義と個人主義は、社会主義によってその完全な理想を実現できるのである。国家が個人の分子を含んで一つの個体となるとともに、世界は国家を含んでその個体の分子とする。故に、個人がそれ自身を最善にするものは、国家及び社会に対する最も高貴な道徳的義務であるように、国家はその中に含む分子である個人と、分子として含まれる世界のために、国家自身を最善にする道徳的義務を持つ。この義務を果たすことによって、国家はルターの言ったように倫理的制度となる。それなのに、個人がその小我を最終目標として国家の利益を害するならば、国家の大我から見て犯罪であるように、国家がもし——そうではない！ 帝国主義者が讚美しているように、今日のように世界の大我を忘れ、国家の小我を中心として全ての行動をとっているのは、まさに倫理的制度であることを無視した国家の犯罪である。個人の自由が他の大我のために意義があるように、国家の独立は世界の大我のために厳粛な意義を持って存在する。だから、偏局的個人主義のように、個人の利益のために国家を手段として取り扱うことは、国家の大我からして不道徳である。それと同じように、偏局的社会主義のように、小我の国家を最終目標として世界の全ての

国家と民族の分化的発展を無視することは、世界の大我からして許容できない不道德である。個人の自由が濫用されれば罪悪であるように、濫用された国家の独立は戦慄すべき無数の罪悪を敢えて行う。——社会主義が世界主義である所以はここにある。個人の自由を認識するように、国家の独立を尊重する。けれど、個人の自由のために国家の大我を忘れ、国家の独立のためにさらに世界のより大きな大我を忘れることを排斥するのである。そうではないのだ！ 小社会を単位とした偏局的社会主義時代の国家は、国家競争のために個人の自由を踏みにじり、個人の自由が踏みにじられた国家は世界の分化に貢献するところがなく、したがって国家単位の生存競争において劣敗者である。——だから、倫理的制度としての国家の理想的な独立は社会主義の世界連邦によって実現され、個人の完全な自由は小社会の単位とする偏局的な社会競争のない社会主義の万国平和によって実現されるだろう。あの個人主義のフランス革命が、自由・平等論の実現のためになされたというにもかかわらず、ついに周囲の同盟軍に対して国家単位の生存競争を開始するようになると、個人の自由は完全に踏みにじられ、ロラン夫人⁶⁴を断頭台に送り、王党の自由をことごとく奪って惨殺した。それと同じように、いかに個人主義の理想が国家競争の下では一つの夢にすぎないかを見ることができし、またあの日露戦争の時において非戦論を唱えた者が全ての自由を「挙国一致」という偏局的社会主義によって剥奪されたことなどは、まさに社会主義の万国平和の理想が一つは個人主義の理想のために唱えられなければならないかを見ることができし。社会主義を小社会単位の国家万能時代における偏局的社会主義と同一視し、個人を社会の中に溶解させると論難するようなことは、まさに浅い思考の持ち主であると言う他ない。そして万国平和の実現によって、国家競争は滅亡の心配のない連邦議会の演壇において行われ、世界の文化のために倫理的制度となり、個人の自由は国家を通じて、もしくは国家を超越して世界の文化に対して道徳的義務を果たすことになるだろう。そして今日、議院内の演壇によって戦われている階級闘争が完全に消滅し、横の格差がない一つの社会となるように、今後連邦議会内において争われる国家競争がさらに完全に消滅し、縦の障害のない一つの国家となるに至るならば——ああ、これぞまさしく黄金郷であって、世界を単位とした大社会の同化作用と障害なく発展する個性の分化作用によって「類神人」は翼を生やして進化していけよう。国家主義と個人主義は、社会民主主義に包み込まれて初めてその理想とする所を完全に実現できるのだ。

5—11 生存競争論の総括

我々に生存競争説の説明に帰らせよ。以上で説いたように、人類の生存競争は全ての生物種族に通じて言えるように、社会単位と個人単位のものであった。そして人類は、さらに高等な生物にまで進化していくはずの過渡的生物として、同化作用によって小さな単位の社会だったものから、次第にその単位を大きな社会にしていった。また分化作用によって最初には村落もしくは家族団体などの個人より大きな単位に分化したものが、さらに小

⁶⁴ フランス革命時にジロンド派に属し、内務大臣を務めたロラン (Roland) の妻のこと。

さく分化して個人を単位とし、ますます細かく分化した競争をするようになった。しかしながら、こうして生存競争の単位において同化と分化を進めるのと同時に、さらに同化によって拡大した社会単位の生存競争と分化によって細かくなった個人単位の生存競争は、その競争の内容を進化させる。つまり、漁業、狩猟、遊牧の時代から、社会単位の生存競争は完全に戦闘によって行われ、また個人単位の競争も等しくそうであったのである。そのため、武力において優れた国家、したがって武力において優れた個人のうち、ある者は（漁業、狩猟、遊牧の時代においては）酋長となり、ある者は（有史後中世史までのように）国王、貴族、武士となり、それによって生存競争の優勝者として存在した。そうであるが、今日においては武力に訴える生存競争は、社会単位の競争のある場合⁶⁵だけに限られたので、軍人階級はそれだけの範囲内において生存競争の優勝者である。しかし、国家内の個人間の生存競争では、中世史以前の貴族、武士のような腕力による強者が認識されなくなったが、それはあたかもあの武士が習いとしていた切り取り強盗⁶⁶が、死刑もしくは他の重罰によって淘汰されたかのようなようである。まさに国内における生存競争は、フランス革命以後（日本においては維新革命以後）に及んで完全にその内容を一変させ、経済的活動の能力に優れた者が優勝者となるようになった。しかしながら、革命以前の上層階級といえども、力の強さが全ての所有権の基礎であったから、力の強さにおいて優れた者が経済的活動の能力者だったように、今日の経済的活動の能力者といえども、理想としては個人主義の労働説によって権利の説明をされている。

しかしそれにもかかわらず、経済的戦争の優勝者は占有説の古代思想⁶⁷を継承し、経済的貴族となることに力を注いでいる。もし中世の武力階級の占有を打破したフランス革命の労働説が、蒸気・電気の発明がなく、平坦な平等の上に行われる個人的な競争の世に行われていたならば、最もよく労働する個人が生存競争の優勝者となっていただろう。しかしながら、これは理想にすぎなかった。機械という封建城郭に経済的貴族階級が立てこもると、生存競争において最上級の優者はその城郭の中で産み落とされた赤子であって、あたかも汚い泥の上に産み落とされたハエの卵がハエの優勝者として生存するかのようになっている。——ああ、讚美されるべき優勝者よ。適者生存とか、優勝劣敗とか、弱肉強食とかいうような文字は、外から包み隠したものとどまっている。「生物種族の環境が異なるに従い、適者、優者、強者となる者を異にする」と言うのはこの意味であり、こうした経済的貴族国の環境に生まれては、いかなる哲学者も、いかなる科学者も、いかなる詩人も、貴族らの馬車の前で叱られる生存競争の劣敗者である。そして経済的戦国時代においては最もねじ曲がっていて、賢くて、残忍な平沼喜八郎氏⁶⁸などが優勝者であったように、トラ

⁶⁵ これは戦争のことを指しているのであろう。

⁶⁶ 「切り取り強盗」とは、人を切って物を奪い取る強盗のこと。辻斬りと同じく、しばしば武士が起こしていたのだろうか。

⁶⁷ 労働説、占有説については、第一篇参照。

⁶⁸ 原文では「平沼氏喜八郎氏」となっている。二人の人物を挙げているとも考えられなくもないが、「喜八郎」というのは明らかに名前なので、挙げ方としてはおかしい。「平沼喜八郎氏」の誤りだろうと思うので、そのように改めた。ただし、「平沼喜八郎」という人物が何者かはわからない。実業家であろうか？

ストの経済的封建制度の時代には、純粋な馬鹿大名を最も優れた適者、優者、強者とする。——讚美を繰り返させよ。政府と学者はこうした生存競争の世を維持するために、社会主義を迫害しているのだ。この経済的貴族国の時代において、経済的武士階級を作っている事務員、学者という優者は、最も奴隸的服従に忠誠を誓った正成⁶⁹と三太夫⁷⁰の心を人の心と考えるものである。経済的農奴の階級において劣敗者でありながらも、なおわずかに解雇を免れて衣食を得ている優勝者は、権利とは何であるかを理解していない精神のない完全な意味の奴隸である。

社会主義の時代には、こうした優者、適者、強者は当然に淘汰される生存競争の劣敗者であると言える。

⁶⁹ 南北朝期に活躍した楠木正成のこと。

⁷⁰ 華族や富豪の家の家事、会計などを担当する者のこと。家令、家扶、執事の三者の総称。